

機関番号：33804

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20592568

研究課題名 (和文) 地方都市の病院で外来化学療法を受ける高齢がん患者への教育支援プログラムの開発

研究課題名 (英文) Development of the educational support program for the elderly cancer patients undergoing outpatient chemotherapy in local city

研究代表者

森本 悦子 (MORIMOTO ETSUKO)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：60305670

研究成果の概要 (和文)：地方都市の病院で外来化学療法を受ける高齢がん患者が、身体的問題のみならず、心理社会的問題に取り組み、QOLを維持しながら治療を継続できるよう援助する教育支援プログラムを開発した。まず高齢がん患者の教育支援ニーズを明らかにし、国内外の関連文献から支援プログラムの要素を抽出後、それらに基づき身体的側面へのエクササイズ及び心理社会的側面への自記式ノートなどを取り入れた教育支援プログラムを開発した。

研究成果の概要 (英文)：We developed the educational support program for the elderly cancer patients undergoing outpatient chemotherapy in a local city. The program supports to approach not only physical troubles but also psychosocial problems, and it continues to treat them while maintaining quality of life. The program is composed of an exercise of the somatic aspect and patients' own writing notebooks which affect their psychosocial aspect.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：看護学 がん 高齢者 外来化学療法

1. 研究開始当初の背景

我が国では1981年以降がんが死亡原因の第一位となった。その後のがん罹患率及び死亡率の増加を受け、2007年4月よりがん対策基本法が施行され、より充実したがん医療を目指した動きが始まっている。その一環として、都道府県に設置されたがん診療連携拠点病院が重点的に取り組む課題のひとつに化

学療法の推進が挙げられている。また、医療費削減による入院期間の短縮やがん治療の高度化に伴って、外来での化学療法を長期にわたって継続するがん患者、とりわけ高齢のがん患者が増えている。患者は、従来の社会生活を維持しながら治療を続けられるという利点の一方で、化学療法に伴う身体的問題

や多くの心理社会的問題に自らが対処しなければならぬ状況におかれていると推察される。以上のような背景をうけ、外来通院で化学療法を受ける高齢がん患者への看護支援体制の確立が急務であるといえる。

しかしながら、欧米と異なり、外来での治療に移行してまだ間がない我が国では、がん患者ががんと共に地域で生活することを支援するための方策が十分とは言えない。とりわけ、がん医療・看護共に情報や人的資源が充分とはいえない地方都市のニーズや高齢がん患者が多いという特性に合わせたプログラムはみられない。患者の身体的側面のみならず、心理社会的側面を加味した包括的な教育支援プログラムの研究・開発が急がれる状況にあるといえる。

2. 研究の目的

地方都市のがん診療連携拠点病院において外来化学療法を受ける高齢がん患者が、身体的問題のみならず、心理社会的問題に取り組み、QOLを維持しながら治療を継続できるよう援助する教育支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

本研究は3段階の研究で構成される。

(研究1)国内外の先行研究及び国内外の外来がん看護の状況をレビューし、外来で化学療法を受けるがん患者への教育支援プログラムに関する要素を抽出する。

(研究2) 地方都市の病院(H市内2病院)で外来化学療法を受ける高齢がん患者の教育支援ニーズ調査を実施・分析する

(研究3) (研究1)及び(研究2)をふまえ、地方都市の病院で外来化学療法を受ける高齢がん患者への教育支援プログラムを開発する。

(1)研究1の方法

1998年から2008年までの論文を対象として

web版医学中央雑誌 Ver3 ならびにCINAHLによる文献検索を行った。キーワードは「がん患者」、「化学療法」、「外来看護」、「高齢者」、またcancer patient, nursing, chemotherapy, elderlyである。文献の採用基準は、過去10年(1998~2008年)に発表された国内外の原著論文、外来化学療法を受けているがん患者を対象とすること、看護援助に関する考察や示唆について具体的に記述されていること、とした。検索された文献を読み、採用基準を満たす文献を選定した。これらの文献のリファレンスにおいて目的に適った文献を適宜追加した。

また国内外の外来がん化学療法を実施している施設を見学し、患者への教育支援に関する現状について情報を収集した。

(2)研究2の方法

対象はH市内2病院の外来化学療法センターに通院中の高齢がん患者(65才以上)のうち認知に問題がなく、研究の趣旨を理解し、研究参加に同意の得られた者で、教育支援ニーズを明らかにするために、外来で化学療法を受けていることの身体的心理社会的側面への影響と、困難と対処等について面接にてデータを収集した。収集したデータは質的帰納的に分析を行なった。尚、研究実施に際しては研究者の所属する大学と対象病院の倫理審査委員会の了解を得た。

(3)研究3の方法

(研究1)及び(研究2)の研究結果を踏まえ、地方都市の病院で外来化学療法を受ける高齢がん患者への教育支援プログラムを考案し、その内容等について、外来がん化学療法に精通する複数の専門家からスーパーバイズを受ける。

4. 研究成果

(1)研究1の成果

①高齢がん患者の特徴とニーズの抽出

対象とした文献は10論文であった。文献検

討の結果、高齢がん患者のニーズとして、a) 情緒的サポート、医療者との関係性の構築などの心理的ニーズ、b) 経済的問題、通院手段の問題、社会的役割遂行の困難などの社会的ニーズ、c) 治療による副作用症状や体力の低下などの身体的ニーズの3点が抽出された。また、教育プログラムを検討する上では、文献検討から得られた高齢がん患者の特徴、すなわち個別的な対応や医療者とのコミュニケーションへのニーズが高いこと、症状マネジメントのほか、栄養学的・心理学的内容、運動療法へのニーズが高いこと、若年患者と情報ニーズが異なり心理社会的な情報を必要としていること、必要な情報量や内容は個々の患者により異なるため適した情報を提供すること、マテリアル（教材）を活用することについての検討が必要であることが示唆された。

②外来化学療法を受けているがん患者に対する看護援助について

外来化学療法を受けている成人患者を対象とした研究は多数報告されている。また、国内において実際に展開されている看護教育プログラムはいくつか報告されているが、すべて乳がんの術後補助化学療法を受けている患者を対象としていた。

外来化学療法を受けているがん患者の特徴は、手術による機能障害や化学療法の副作用症状などによる身体的問題、がん罹患や再発、転移などが引き起こす心理的問題、経済的負担や仕事の調整、地域の人間関係などによる社会的問題など、複雑な問題を抱えて生活していることであり、文献検討の結果、外来化学療法を受けているがん患者に対する看護援助として、A) 日常生活や役割遂行の維持に向けた支援、B) 患者のセルフケア能力の見極めと向上のための支援、C) 継続的に情緒的なサポートを提供できる場と時間

の設定、D) 科学的根拠と患者のニーズに基づいた情報提供と自己学習支援、E) 医療者、患者、家族の間における情報共有と連携体制の整備が抽出された。

③国内外の病院視察

国内視察として高知大学医学部附属病院、高知県立医療センター、癌研究会有明病院、及び、国外視察として国立成功大学医学院付属病院（台南市：台湾）、柳営奇美病院（台南縣柳郷太康村：同）、第三軍医大学附属大坪病院（重慶市：中国）の計6施設の視察を行い、がん患者への教育支援に関する情報を収集した。いずれの病院も地方にあり、外来化学療法センターの患者層は高齢者が多く、患者数も増加傾向であるという共通点がみられた。専従看護師のマンパワー不足が現状であり、「安全な治療の提供」が最優先されていた。特に外来化学療法導入時の患者へのオリエンテーションは重要であり、副作用と療養生活に関するパンフレットの充実が求められているが、パンフレットは各々の病院のスタッフによる自作、または製薬会社が製作したものを使用しているのが現状であった。

(2)研究2の成果

対象は、H市内のがん診療連携拠点病院2施設で外来化学療法を3ヶ月以上継続している65歳以上のがん患者16名（男性7名、女性9名）、平均年齢は73.2歳で、外来化学療法継続期間は3ヶ月～8年であった。

①高齢がん患者のニーズとして、【治療と自分らしい生活の維持】【在宅療養を円滑にするための情報提供と医療システムの整備】【配慮が行き届いた的確な医療・看護の提供】【治療に関連した身体的苦痛の緩和】【身近な人的資源からの情緒的・手段的支援の確保】の5項目が得られた。

②高齢がん患者が体験する困難として、

[治療の副作用で四肢のしびれや痛みがある][随分やせてしまい悲しい][治療のために体力が落ちてきている][化学療法で良くなるのだろうか][調子の悪いときの自己判断が心配][これからの一人暮らしが不安][自分が病気になり家族に迷惑をかけている]など14カテゴリーが得られ、各々の関連性を検討した結果、〈治療による様々な苦痛を伴う副作用症状〉〈回復しがたい体力の低下〉〈がん罹患・再発のショック〉〈病状悪化と治療の不確実さへの不安〉〈自己での問題への対処法の不安〉〈通院治療継続の心細さ〉の6つに分類された。以上の結果より、地方都市で外来通院の化学療法を継続する高齢がん患者への教育支援として、外来化学療法に伴う困難や苦痛、生活の変化に脅かされることのないよう、治療の継続と日々の生活の維持に向けた身体的、心理社会的支援が重要であると考えられた。

(3) 研究3の成果

(研究1)及び(研究2)より明らかとなった地方都市の病院で外来化学療法を受ける高齢がん患者の特徴や体験する困難、ニーズ等を踏まえ、以下のプログラムを開発した。

①プログラムの目標

地方都市で外来化学療法を受ける高齢がん患者が、通院治療に伴う身体的かつ心理社会的な困難に対処しながら、QOLを維持し主体的な生活を送ることができる。

②プログラムの構成

プログラムの実施は個別介入とし、第1回目：外来化学療法開始時、第2回目：開始から一ヶ月後、第3回目：開始から二ヶ月後の計三回からなり、各回一時間程度の実施とする。

③使用するマテリアル、用具

「わたしのノート」：既存及び先行研究から研究者らが作成した日々の生活に関する資

料と自記式ノート、エクササイズDVD：研究者らが作成した基礎体力をつけるための座位でできる簡易運動のDVD及びリラクセーションCD

・第1回目：外来化学療法開始時

現状を受け止め化学療法による生活への影響について理解できることを目的とし、以下の内容を実施する。今後のスケジュールの確認、日々の暮らしぶり・現在の不安などが表出できる、自記式ノートの活用法を知る：(以降、「わたしのノート」活用)、利用可能な社会資源について知る、栄養(食事)と運動について知る、リラクセーションおよびエクササイズ(CDおよびDVDを用いて)の実施。

・第2回目：開始から一ヶ月後

治療に伴って生じる日常生活上の変化に対応できることを目的とし、以下の内容を実施する。日々の暮らしぶりや治療による影響が表出できる、「わたしのノート」の内容の確認と評価、治療開始からの栄養(食事)と運動について話し合う、今後の日常生活の留意点、緊急時の対応についてともに考え話し合う、リラクセーションとエクササイズの実施。

・第3回目：開始から二ヶ月後

外来通院治療に伴って生じる変化に対応し治療を継続できることを目的とし、以下の内容を実施する。日々の暮らしぶりや治療による影響が表出できる、「わたしのノート」の内容の確認と評価、リラクセーションとエクササイズの実施。

本研究の結果、地方都市で外来化学療法を受ける高齢がん患者が身体的問題のみならず、心理社会的問題に取り組み、QOLを維持しながら治療を継続できるよう援助する教育支援プログラムが開発された。今後はプログラムを多施設において実施し、プログラムの構成や内容等の妥当性を検証し、修正を加えていくことが必要である。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

- ① Etsuko Morimoto、The experience of elderly cancer patients undergoing outpatient chemotherapy in regional cities in Japan、16th international conference on cancer nursing、2010.3、USA.
- ② 井上菜穂美、外来化学療法を受ける高齢がん患者の教育支援プログラム開発に必要な要素の検討、第24回日本がん看護学会学術集会、2010年2月、静岡.
- ③ 井上菜穂美、地方都市で外来化学療法を継続する高齢がん患者のニーズ、第29回日本看護科学学会、2009年11月、千葉.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森本 悦子 (MORIMOTO ETSUKO)

聖隷クリストファー大学・看護学部・准教授

研究者番号：60305670

(2) 研究分担者

片岡 純 (KATAOKA JUN)

愛知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：70259307

小島 操子 (KOJIMA MISAKO)

聖隷クリストファー大学・看護学部・教授

研究者番号：50035333

井上 菜穂美 (INOUE NAHOMI)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教

研究者番号：00454306

村田 弓枝：(MURATA YUMIE)

聖隷クリストファー大学・看護学部・助教

研究者番号：20350910

(H20→H21年)